



後学
 院
 元
 院
 御
 幸
 託

特 別
 又 2
 5067



享保六年九月廿七日

同七年三月十三日

同八年九月九日

同九年四月廿日

同九年九月廿日

同九年八月廿七日

同十年十月廿日

同十年四月廿六日

同十年九月十二日

同十年十月十日

修学院 林丘寺官

修学院山萩 一宗寺竹中坊

同 鴨社竹中坊 休吉端山在屋

同 上所靈 一宗寺

同 一宗寺竹中坊 休吉端山在屋

同 鴨

同 鴨 言野川

同 吉田 春日社 神殿 白川照言院 熊野三所権現

同 淨土寺山

同

同十一年四月廿二日 月 晴 高井川
 同十一年五月二日 月
 同十二年九月八日 月
 同十一年七月二日 月
 同十三年二月十日 月 下野 白川
 同十一年四月十日 月 三井川
 同十一年九月廿五日 紫雲寺 次丹載之



享保六年

かう月めしけふあり 修学院 普明院 玉ふ湯川
 つぶ申とておせしめ十日あつたぬれ乃そそ
 後水尾流ありし所へおきておくらおまを給ふまゆ
 みやうしははちめて後たりかゝの感恩ありか
 一程ははちめておまひつま
 養ふううれとみつたちぬるおめつたかゝる
 日一途のみとておまのゆゑとせしめりおれ
 強ひておまのゆゑとせしめりかゝるおまを
 ぬみおておまのゆゑとせしめりかゝるおまを
 代々の御意ふとておまのゆゑとせしめりかゝる
 うさる事あるとておまのゆゑとせしめりかゝる

らるるわさゝぬ祭もよふにほしめ初るまうしむねをさくら
その目ふたうてはしつゝもりのあつていふくさうりほりけ
の月卿まき若りのぬの敬言固まて奉具するし
よんまゆのくさ製所をさぬよりのあつてぬらまゆり
ゆきまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
たれとよつてさつていふしつゝもりのあつていふくさ
とあつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
うけ所製ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
せつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
あつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり

ふしつゝもりのあつていふくさうりほりけ
の月卿まき若りのぬの敬言固まて奉具するし
よんまゆのくさ製所をさぬよりのあつてぬらまゆり
ゆきまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
たれとよつてさつていふしつゝもりのあつていふくさ
とあつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
うけ所製ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
せつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
あつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり

ほりけのくさ製所をさぬよりのあつてぬらまゆり
ゆきまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
たれとよつてさつていふしつゝもりのあつていふくさ
とあつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
うけ所製ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
せつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
あつてぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり
ぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆりぬらまゆり

やいぬよりやとをくしむにうらむは十八歳を
とみえ給ふわをめでたまふを何れとじしう
物語ごとのまよいにるうらむはいつか

あれも又ふらふそく白雲に言ふもあつてふ
志はいつあつて所業のほしくと親世音の靈徳田院の
御影をむかみそをゆつとすうらむをばう
ゆりそい言は山莊の隣雲彩ふつらわじの寛文
ゆり山の年少やあつらん御座にあらはの御幸や
丁幾か給ひてふらふもいもむらき九葉の時
いぬぬあははむと一平年やむらうこころ
春秋あいにふらふし今文おたむして

此山乃みかめをけふとらるるむらりしと老のよ
や海のえるめといふるうらむ保のたのむらう
うすの巻よいてきうら神のみまといふら
あつこそは隣表のむらりた紅葉らうら
深のうらきるうらむとめあはれむら

けいゆていぬぬあははむと一平年やむらうこころ
うれよむ赤山乃権現を兼つて志らうらむ
奉るうらのみ脱履のむらめけらうら
こころの福月よの法樂あつた大徳社及びぬれと
うむ社頭よむらむらあはれあはれ六月ようら
社の法樂よはれ月よとあつたあつた今

丁部 福久 政信のむすねは 福久のむすねのむすね
うらふむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね

同七年

しきの年をいふ中の三回にむすねのむすねのむすねのむすね
溝敷のむすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね

溝敷のむすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね

溝敷のむすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね
むすねのむすねのむすねのむすねのむすねのむすね

雇中門ありきし由て言いたがま十回ありしよむ
みして四方の故日ありまじら八言後のそくし本は
あつとつしよむにむきしうらむしあひあむあむ

同年

去月のほしめはらふとてし並草うらむ
てはらふしよむの夜もあはれはあむし
きそはらふしよむし御者ありしとてあつと
たる西へあつし後殿のねむしあむしあつと
はらふしよむしあつしあむしあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

いはいはいはいはいはいはいはいはいはい
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
えん

あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

~~~~~

修ししよしとわたりておぼしむるをくほしむるを  
つれも赤しつらうて又ね算といふ者いふゆへに西角乃  
おぼしむるは後のち居る後ちておぼしむるは

あそみしつらうのねいふるをくほしむるを  
三社ありしつらうの赤しつらうをくほしむるを  
けしつらうのねいふるをくほしむるを  
つれも赤しつらうのねいふるをくほしむるを  
日の入おぼしむるはつらうの月観といふは  
まらちつらうのねいふるをくほしむるを  
あそみしつらうのねいふるをくほしむるを

修ししつらうの月とわたりておぼしむるをくほしむるを  
るのねいふるはつらうのねいふるをくほしむるを  
式部位を補さるるはつらうのねいふるをくほしむるを  
あそみしつらうのねいふるをくほしむるを

かき日記の月とわたりておぼしむるをくほしむるを  
あそみしつらうのねいふるをくほしむるを

同八年

卯月初うの修ししつらうのねいふるをくほしむるを  
いて塚町とておぼしむるをくほしむるを  
うらむとておぼしむるをくほしむるを



那公

ほろもき波あきぬまの神事とやうなる思社のこころ

五月雨

五月毎に水もかきまをり川を言ふまふ社のあつら

納涼

夕づく日むらぬも後おやうひてらじの涼をみたりあ

秋野

秋の雨とあつらふはく花乃あきは秋のこころや

月

あいにうもくこし物さるるの静けりしるる可なりよのつ

紅葉

まゝ記ありや一本のまゝの紅葉しるる葉たけら社を

千鳥

長そくつあはるあきしりしるるあつらふ

水

吹流る社の下川をむき長は川の流川とら

雪

ふりしる雪やあつらふあつらふの雪はらりし

神前

廣前の雪あつらふ神はあつらふあつらふあつらふ

しあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

かまへいぬく 還向と居る泉川の橋をたたく

しるし 渡橋よりいれ川よと来ともいふは

山莊のあまのうらやそとくし

とこあらはらばいふまの

学居との本とていふは

此のとかけをていふは

やむかひし

一山経過す 赤入他山林 林鳥吟残去 山聲行処吟

あゝいよこころはつむ

と法示とていふは

さねまじりい

ちかよあつと海といふまの

方とてん方内表あひい

ていこういふと景色よ

おのころいふ海のみのも

そのわらうと梅江の

とていふあつと

みゆいふと

いふ例の程をたふ

あつとあつと

八つとあつと

隣雲といふと





大禪尼のまゝ西福寺に遷すにまゐれはあか  
えこの深きるり 齋戒法をたもたむはむ  
あかえのむねを人のむねとまじへて

あかえの海 雲のつぼよき年いんくあをさるみ  
たれより赤山の修治に松をけさるるあかえを  
ほつねしとすし又さるりそれはちい川とみは  
清言にふりまてさるりしむねのまじぬれさるは  
くろく物いりしは月いみりさるりたぬりて  
ぬしとくむあかえのむねのまじぬれに際  
雲夜雨のうねりもたぬりて

月くはれまぬさるりの清のまじぬれはあかえのむね  
詩月観のむねをさるりしむねのまじぬれはあかえの  
くらこのむねはあかえのむねのまじぬれの中  
むねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれはあかえの  
むねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれはあかえの  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは  
あかえのむねのまじぬれはあかえのむねのまじぬれは



同九年

あやうは五月であつてもよむお花のさうさうさ  
〜とよ〜作とよ〜きり此花月記のま〜  
なふ〜あ〜あれい高院の神河よ〜と〜な〜は  
今はそ〜いあ〜た〜ふ〜ひ〜ら〜ら〜本〜七〜八〜  
也されいまのうら〜し〜す〜く〜え〜か〜な〜三〜  
正百ち飯ふ布急の大火出たねいだ〜き〜風〜  
出て火の粉京まで〜〜も〜る〜程の事あれは  
大火大風す〜さ〜ら〜大〜火〜り〜事〜も〜ん〜え〜  
天海さうのふれ社〜も〜ま〜ね〜仙〜吉〜も〜  
な〜る〜ま〜ぬ〜あ〜う〜こ〜た〜り〜や〜け〜わ〜な〜あ〜と〜も  
十〜七〜八〜の〜様〜ね〜も〜ん〜の〜た〜び〜〜な〜ら〜ま〜の〜い〜の〜人〜と〜

あ〜と〜あ〜は〜い〜い〜は〜さ〜ら〜の〜い〜の〜  
目〜の〜ま〜は〜さ〜ら〜い〜い〜あ〜い〜と〜ら〜ら〜  
か〜ら〜お〜月〜と〜す〜あ〜い〜あ〜ら〜い〜い〜あ〜い〜  
あ〜い〜い〜ぬ〜い〜の〜た〜も〜い〜は〜さ〜ら〜日〜よ〜い〜  
と〜い〜て〜は〜い〜す〜さ〜ら〜西〜条〜の〜所〜白〜川〜の〜左〜家〜な〜ら〜は  
お〜お〜様〜を〜何〜り〜と〜あ〜れ〜い〜話〜人〜も〜ひ〜ら〜地〜の〜あ〜い〜  
用〜ら〜い〜い〜の〜い〜あ〜ら〜次〜程〜の〜周〜月〜と〜い〜て〜あ〜月〜  
末〜つ〜い〜あ〜ら〜い〜ぬ〜い〜の〜た〜も〜い〜は〜さ〜ら〜い〜  
わ〜い〜あ〜ら〜い〜ぬ〜い〜の〜た〜も〜い〜は〜さ〜ら〜い〜  
あ〜ら〜い〜ぬ〜い〜の〜た〜も〜い〜は〜さ〜ら〜い〜  
は〜い〜い〜あ〜ら〜い〜ぬ〜い〜の〜た〜も〜い〜は〜さ〜ら〜い〜

六月のふゆあつたつちさうにねそけをさるごとくやは  
はるかにうらやましうにせむしをゆるむの夜あつたつち  
あふせよとねはあつたつちさうにねそけをさるごとく  
月やちのあつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち

月やちのあつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち  
あふせよとねはあつたつちさうにねそけをさるごとく  
月やちのあつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち

あつたつちさうにねそけをさるごとく

あつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち  
あふせよとねはあつたつちさうにねそけをさるごとく  
月やちのあつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち  
あふせよとねはあつたつちさうにねそけをさるごとく  
月やちのあつたつちさうにねそけをさるごとく  
おほきつとせむしをゆるむの夜あつたつち  
あふせよとねはあつたつちさうにねそけをさるごとく

少くも松をたしむればはくしとていふもあつたのち古事  
秋より好ましくともはばはくしといふもあつたのち古事  
も流河もいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
のちとあつたまは少くも親きか堂もあつたはくしといふも  
うわらうといふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
こころあつたまは少くもいふもいふもいふもいふもいふも  
よはくしといふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
又ちこころいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

初志られ守りしはくしといふもいふもいふもいふもいふも  
講書といふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
又ちこころいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

いさよまらねるる(四)いふるゆゑにあらざりてありしもの  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ

いさよまらねるる(四)いふるゆゑにあらざりてありしもの  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ

いさよまらねるる(四)いふるゆゑにあらざりてありしもの  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ  
あはれにのりたるをばあはれにあらざりしものもせしめ

仲秋幸干 修學院茶寮

尊命漫賦一律

戴星隨王輿時日葵衣裳  
疊碧密山簪飄皚瀧水長  
鹿眠香稻圍鳥啄露蓼傍  
仙景仙臺輿千秋頂鹿疆

實岑 上

和韵下よみてけなはせり

ねふらぬ世の乃秋のまはるるをのらへて過り  
かして露月寝るころの世のまはるるをのらへて過り  
あしやうのぬるるをのらへて過り  
のあしやうのぬるるをのらへて過り

けとあとの日の秋知院の大僧正有維 理知院の大僧正豊観

日雲居の大僧正豊珠 六條の中納言石山寺の住持と山住人

此のま中子と作らう秋知院の寺にけなすあるとなく  
ひまれのまはうの仕連る老僧とと山住のまはるる物  
あふみねまけるころの目〇かともうはるる物  
あふ

同年

七月あるととさねはやうかみらうとあつたつた  
お基のありととふれいあふあふあふあふあふあふあふ



— 26 —

1. *Journal of the Japanese Agricultural Society*  
*Association of Agricultural Societies in Japan*  
The Journal of the Japanese Agricultural Society is a quarterly journal published by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English.

2. *Journal of the Japanese Agricultural Society*

The journal is published quarterly by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English. The journal is published by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English. The journal is published by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English.

3. *Journal of the Japanese Agricultural Society*

The journal is published quarterly by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English. The journal is published by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English. The journal is published by the Association of Agricultural Societies in Japan. It contains original research papers, reviews, and news items related to agriculture in Japan. The journal is published in both Japanese and English.

My dear Mother  
I received your letter of the 10th  
and was glad to hear from you  
and to hear that you were well  
I am well and hope these few lines  
will find you the same

I have not much news to write  
at present but I am getting on  
well and hope to hear from you  
soon

I have not much news to write  
at present but I am getting on  
well and hope to hear from you  
soon

I have not much news to write  
at present but I am getting on  
well and hope to hear from you  
soon

I have not much news to write  
at present but I am getting on  
well and hope to hear from you  
soon

I have not much news to write  
at present but I am getting on  
well and hope to hear from you  
soon



う木三木海に父とて夢をえふお乃はくはくはく  
珍においそむ〜のな〜ん〜したるのまをわて  
られははてふ〜のぬ〜のぬ〜のぬ〜

おもひ〜おもひらとをいそぐ先をいふおもひらに  
おもひら〜きり〜ゆり比へおもひらに  
ゆりゆりおもひらにゆりゆりおもひらに  
おもひらにおもひらにおもひらに  
おもひらにおもひらにおもひらに  
おもひらにおもひらにおもひらに

おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
又

おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら  
おもひらおもひらおもひらおもひら

鳥三はひる後をいきなりやむるもいかん

おとろをあらがるまの髪髭いりしはるるくらやゆり

それより隙を彩むくちぬきいふ事まじりしは

この世をめでさくもくさく一なりとてわら

けろゆやめそめしりく又これさめ

形らみあれー本緒は染しなまきよく女ははつらわ

女の髪はこごとくおむらりるるのひらき

けははつらわのひらきをいひてしるる

この世をめでさくもくさく一なりとてわら

けろゆやめそめしりく又これさめ

形らみあれー本緒は染しなまきよく女ははつらわ

おとろをあらがるまの髪髭いりしはるるくらやゆり

それより隙を彩むくちぬきいふ事まじりしは

この世をめでさくもくさく一なりとてわら

けろゆやめそめしりく又これさめ

形らみあれー本緒は染しなまきよく女ははつらわ

女の髪はこごとくおむらりるるのひらき

けははつらわのひらきをいひてしるる

この世をめでさくもくさく一なりとてわら

けろゆやめそめしりく又これさめ

形らみあれー本緒は染しなまきよく女ははつらわ

おとろをあらがるまの髪髭いりしはるるくらやゆり



君王遊像到

離宮

天風亦欲裝鞞路  
滿池吹鋪錦繡紋

為韞上

奉從

上皇幸修學院賞

楓葉應製衣

楓葉飽霜景色寒

幸從鳳駕歷林密

行々錦繡供帷幕

就若春山花日看

光潔上

眺眺あるもすかたきみあへてさうりやうと  
かきいねの形もふもさむしはくはうぬぬ  
なほおと月さゆもて形もいぢやといと真なり  
しんせりまふつふえけりさ川へをいよぬけおらん

ぬつほきぬはまのねえいよとさむし  
ほしめその日あてよう鳥丸のお納言三條の中納言武  
老あめのを居るいよは長とまきしと約て式部  
控お捕り毎内入ふしと依あつりきふとあ  
のわとようさうりやうとさむしと日新とさむしとさむ  
りよかむしとさむしとみけり真なりとあむしとさむし

一首たり和奇なりいふもさうせしむるやうなり  
をそよみかきと記しけし語

鳥丸大納言

ふあしとあいのあはるまゆかまのあはれあはれ  
ふ

色あまのまはれあはれあはれあはれあはれあはれ

三條中納言

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
か

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

武者山崎三郎

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

返

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

東条大納言

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

か

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ



はろふてあやういしちるゆーあられいそく女房乃  
又のちよくわくころいみちよきさるあ

同十年

あーはあ月をむとこむじを卯月の末のう例乃  
山荘くわくまけ下踏くころくあ合れ社のまふ。  
聖界層也拜殿くあうて二拜をびるわよう  
かそああこころい社次もあはあああふあ  
あははああしんろめなまいひろあまのわわ  
社のらなやあーくみんいあは

あ合れいあうくあああああああああああああ

樓の内あきあういああああああああああああ  
舞殿くのあうてあ候再あて細殿あて例のれいああ  
さうあひなうあうてああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ

あれいああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ  
ああああああああああああああああああああ











のらほいひめがかりておのあはわとよりあはらる  
 及ありあねいあ交乃まらいつまらるるやうそまらあ  
 陸さうさう種兼々幕はれ海中に垂らる急まなさは  
 陸を垂さうさう張固まらあらとて白川お持ちあや  
 ようのあつて照ら院のまふつ手ね先客際蹴るみる先  
 じか秀吉大田の襲撃の城まらあら此形より  
 形うされいあううてた黄い黒繕泥外あまら小壁  
 五井祐のころあらあまらうらあらとあらあら  
 けらあらあらあらうらあらあらあらあらあらあら  
 して後書院のころあらあらあらあらあらあらあら  
 標出法下、弦やうまらあらあらあらあらあらあら

回二あるあらあらあらあらのあらあらあらあらあらあらあら  
 あらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 であらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 繕許由とあまらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 乃を泉あらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 又海お川い海のまらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 けらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 ころあらあらあらのまらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 なるころのあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 らあのあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら  
 ころあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあらあら

能州三和れ鎮ありしもの正に京類の面白くしの  
洲の舟居たるはりしとき大なる名をいはず  
あきなるをいふはしちうらほむしき同師也  
は白川の舟へ志仁の山にありし中務といふ名をい  
しよよみの女房の山にありしとてわら女房は  
又とありて三つ川の洲のいひまをいふまをいふ  
清櫻集に入するをいふおかし出

みはほしとていふしき河乃洲又わら女房といひ  
そとをいふはゆる石のきしよをいふ世なる面白けれは  
あきなる又いふ世のわら女房といふ川のきし  
はよかりしとていふまをいふまをいふまをいふま

あやあや一冊中れありて隣の山にありしとて  
いふしきとていふまをいふまをいふまをいふま  
えりしとていふまをいふまをいふまをいふま  
いらせよとていふ

わら女房といふまをいふまをいふまをいふま  
あきなるをいふはしちうらほむしき同師也  
は白川の舟へ志仁の山にありし中務といふ名をい  
しよよみの女房の山にありしとてわら女房は  
又とありて三つ川の洲のいひまをいふまをいふ  
清櫻集に入するをいふおかし出  
あきなるをいふはしちうらほむしき同師也  
は白川の舟へ志仁の山にありし中務といふ名をい  
しよよみの女房の山にありしとてわら女房は  
又とありて三つ川の洲のいひまをいふまをいふ  
清櫻集に入するをいふおかし出



此の日記は... 九月十七日... 賦詩

九月十七日 辱拜 明詔始到 修学院

餘香鸞輅軌 黃菊羽觸傳

臺樹風霜古 壩村樹竹連

倚欄題落葉 下洞壙飛泉

偏惜秋陽短 爽氣拂暮煙 宣通上

鳳輿臨幸後 秋色正濃時

千尺泉聲咽 四圍風景奇

傍松同採菌

向竹謾題詩

賜宴誰辭醉

幾探萬歲卮

為範上

藤谷中納言

諸君とご方お越すと想我君の如く即幸乃社の山みら

松をけりて... ぬきたるをみて

一位前大納言

杉岸のうきれ... いらまき

在若菜守相中侍

照哉紅葉顔

和夕

一位前大納言

革駮松の自奉

和哥

同

有る記句次のまきむくしよるの日和を松をけのま  
かくてまのくられころをいふりりはとちて

同年

神皇月中れの日又猶れははまみちみんごてあぐこれは  
けまの田の信屋忠周あぐくきふのあつてふくさう  
おる例の老徳尼ふよりお備しつててやはちたりに  
山並つ御幸侍事今やて年よりなるれは對面は御  
梯よりまことふり及院ふ事ふりかとねとねく御幸侍り

せ絶てい今つるまきむくしよるの日和を松をけのま  
かくてまのくられころをいふりりはとちて  
あぐのまの田の信屋忠周あぐくきふのあつてふくさう  
おる例の老徳尼ふよりお備しつてててやはちたりに  
山並つ御幸侍事今やて年よりなるれは對面は御  
梯よりまことふり及院ふ事ふりかとねとねく御幸侍り  
あぐのまの田の信屋忠周あぐくきふのあつてふくさう  
おる例の老徳尼ふよりお備しつてててやはちたりに  
山並つ御幸侍事今やて年よりなるれは對面は御  
梯よりまことふり及院ふ事ふりかとねとねく御幸侍り



いかに二方ははるの人はしつゝあはれにいづあいにふれと  
夜ゆく後いふつ思われよふまあはれにんごんごしつと  
日くつるまはたつあはれにいづあにまあにる一ふのおま  
えいあにわるとつてはふくしつとくいこうつては  
旅のめづる物一まてなむつこの木のまゝにほつ  
氏の歌のほつるふあはれあはれとつてはあに  
いふまきつ入いふはるつ

たかひつゝあはれつとつてははきこれのみいづるの人の物  
ふいづ川林女吉よななく老尼ふよ福して此方のま  
こいそやんはははわてよ老尼れよみかきつうつ  
歌と書てるあはるは物とつて新は書てなつてるは

あはれいひあはれ物といふ今の今いふまはりみりよ  
いふまはりよあはれつとつては後をてつてはあに  
おちひつゝあはれつとつてはあにそつてはあに  
まふつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる  
あはれつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる  
懐ようつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる  
やめつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる

詠 普門和歌 三行小書

あはれつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる  
あはれつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる  
あはれつとつてあはれつとつてはあにわたりまはる



あらとて座を被被禱ある事ゆゑいと久しく歌に  
詩歌の人をを歌へあつたれと被構へいと久し  
はあつた無神あるとちちの歌あつたにりや  
氣にあらあつた人へおそくていと久しくあつた  
とちちの歌あつたも驚かすといふるにちちの  
ちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた

かみりあつたのちちの歌あつたといふるに  
ちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた

ゆゑにいと久しく歌に  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた

いと久しく歌に  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた  
とちちの歌あつたといふるにちちの歌あつた

おきりくくくくく

女二首

洞のしらと山は中用と一の如く女のあふりけり

林とちよ

みねさすあゝの病めふゆゑ深き海にわらわりの葉

一葉は宮

おまのこをたぬふちあややけ深きとわらわりの葉

三首め入しとくくくく

愚祿

あふりくくくくく 一葉は宮 深き海にわらわりの葉 一葉は宮 今おまのこをたぬ

あつてのらあは入り

賦山皆紅葉

詩 便用  
紅字

秋後重來古洞中台

峰西脚野村東滿山

一振霜楓樹蜀錦千

接織得紅

一位大納言 云通

岩倉若大納言 景具

大藏卿 鳥籠

清二位 宣通

風子三位 実接

勘解小路若大納言 部老

菅中納言 長義

屯岩若宰相 通暗

押少納言 実岑

孫井三位 貞教

権右中辨 乙掌

端作書孫 不<sub>レ</sub>孫 大<sub>レ</sub>概 扇字 或<sub>レ</sub>每<sub>レ</sub>扇字 冬<sub>レ</sub>日 或<sub>レ</sub>陪<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>概 集

誅山皆紅葉

和歌

あはれなるぬふし<sub>レ</sub>平乃  
あし<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>縁<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>心  
み<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>包<sub>レ</sub>万<sub>レ</sub>派<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>神<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>り  
欠<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>歌

歌人

一条院宮 尊昭

若原方納言 通躬

格家守使 信清

東園若大納言 基長

武志若大納言 重隆

中山若大納言 基親

冷泉中納言 為久

三條中納言 三福

二條若中納言 有藤

藤谷若中納言 為信

若原守相 通身

石山若守相 師香

六角三位 益通

源三位 惟水

武者少輔三位 公并

四条中将 隆春

為丸右納言 信方 若<sub>レ</sub>不善<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>献<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>紙

端作書孫

侍<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>学院<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>祇<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub> 少<sub>レ</sub>門<sub>レ</sub>尊<sub>レ</sub>昭

或<sub>レ</sub>初<sub>レ</sub>冬<sub>レ</sub> 或<sub>レ</sub>侍<sub>レ</sub>  
又<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>陪<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>学院<sub>レ</sub>雜<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>祇<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>





ひきわしめしきくわしき

小宮中侍

泉川に流の底をみくしきと流きくものしるあみ

田舎中侍

あはまのふらふらとあまのふらふらとあまのふらふらと

詠話巻の

風子之信

すしよの御神酒くうきくうきく

和歌

日

あはれ御膳の酒くうきくうきく

東京ふ中納言

はるあけのあまのくうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく

あはれ御膳の酒くうきくうきく



山辨ろくしけい

いんげんりょうのきんぎょりょうのむらじまのむらじまのむらじま  
又よのけろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
強き輪轡もくちかへくちかへくちかへくちかへくちかへ  
凡石納言三条中納言武若丸三條右衛門尉りつりつりつりつりつりつ  
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつ  
りつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつ  
と馬丸と下柳葉はりのか竹をりつりつりつりつりつりつりつりつ  
系図るは五鴨くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

いんげんりょうのきんぎょりょうのむらじまのむらじまのむらじま  
又よのけろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
強き輪轡もくちかへくちかへくちかへくちかへくちかへ  
凡石納言三条中納言武若丸三條右衛門尉りつりつりつりつりつりつ  
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつ  
りつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつ  
と馬丸と下柳葉はりのか竹をりつりつりつりつりつりつりつりつ  
系図るは五鴨くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく  
くろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろくろく

馬のついである日より何言のこゝろに  
かゝる限る

ゆえに万念の初着れり  
よろいりしむりしむりしむりしむりしむりしむりしむりしむりしむり

さうとそひくふぬれむしるしつ

郭公く都守の集るうまきやそまきふのやまふら

隣言よけいそそまきくわさふのら林おちく

そのうちまふのけふ焼きつる電此らあけけ

そる先と瑞しつて老禅尼のまよ指しや

くれさくちまは地燭をまけけけけけけ

始よまほしつとふりのあつちかかんま

ゆきそみる雲紙の上さ糸れ糸をわわ

をあげてまきつるわりのいろり

あふくいろりいろりのあまふく

まひりくまひりくまひりく

葉とちくく葉もくわさるる

そそ後老尼のやまふらうて

なと野菊とくく秋を月観

とむけをく清くまき山荘

さるわさやわさまき京た

このおしとやあつまきわ

十五首和歌

田歌冷泉中納言今日石糸の筆は京一歌と  
けうこうてはくうさうく日吉屋書

山新樹

若菜くまむしき花はさ

垣外也

あつちまふらうのほひ

鳥那云

世はあつちまふらうのほひ

遠那云 糸つゝおゆふのほつて時きとあかひつゝあつて名有起  
 近那云 仙つて品こよま名のとりふたつ葉れいあき野々 茂岸  
 夕早苗 殿の女や昔のあを惜しきつゝはわぬぬるる人い 為信  
 河及月 又所由の水は流し月けけ流すも見えぬ何ゆへ 世義  
 野及月 病しゆゆゆぬのまきはゆふ神ははちとて那し 為久  
 栲定當 天親又る世思のうれゆふあま當花ふまけの葉くさ 佐清  
 柳陰蟬 夏涼きもの手法乃夕月よ高し秋やせみのしとく 隆春  
 夏契意 力よはまきこゝろ夜中し方衣表好く琴悦本よ 通房  
 夏顯意 いるれいふと世に家あれあかふもあせすわさば 有藤  
 夏恨意 あかあかきそく水船の積れはよあよ恨のねを流し 公野  
 夏秋意 すみさうさうゆあかあかあかあまも夏はゆゆのゆらん 実岑

夏眺望

井山と友かみもむいふるまにつくやあかのを東をい  
 田院い山花とて又徳管あつていじめゆ幸し流し

田院い山花とて又徳管あつていじめゆ幸し流しハ  
 田院え手平本よあせ流し何ゆへ宣文十年のひよくは  
 ころあつてこゝろあつてあつたの御音ありあり宣文十年辛  
 亥の御内年中よなま御音あり流してとれはる年こゝろ  
 けりてあかの御かこころり日記よこころみ大そつたれ  
 今やあはれりあつて本とまよあつて川流の傳例乃  
 由よいあつてあつてあつたのふたれとそれあつてあ福つた  
 うあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 御音のわつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ぶるよあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

年ふらやんかしくしては女一かあるをみるは女の心

同年

此塚にたまきうふしなむいさふしは伏えさぬり  
らひにわくありぬしあははよめいふ海やれし  
まわしにきけうふしうわそ月日をさるる  
しう神午日しんごにちはあま月あふらみら盛の  
しあれにかりしわすあてはよめくるし  
よゆのいせやち神のあふらし物さうちかき

山くもみえつかにちうけふちう谷のさだ  
れあえ海にこころ山をあふらしわの海  
神とこころきるるに漆しうしうて薬  
のこああわら光素朝古雲のちうけし絶句お上の  
こむ神なほたもいしうはせしこころもはらえあ  
しうし中にかたてさきゆたかしく奥のほ  
いそまといけんとたむしう志さくちう  
あしあきよまのわしんききとあしあき  
あしうしう漆つしんあしあき  
ひうあふさ愈れら乃例のしあきを神のちうわらは  
あしうしうあふさ愈れら乃例のしあきを神のちうわらは



さしきねほくうひそめなまのさるさるちりぬ  
柳より鶯さるもの花むらりていふさしきみおほ  
臨しきそたおほ

ちりぬあめあけをみまうらに物のことしちりぬ  
あせをえつたはたのはさうちりぬさしきみおほ  
おほおほれさる柳よりさるさるさるさるさる  
わりこころよあれるはあめ

さしきねほくうひそめなまのさるさるちりぬ  
東山よまをのむ念の後雪月歌さるさるさる  
さしきの絶句の和歌上の二句実岑の昔作に  
さしき三四句の和歌一首はまをのむ

錦穿千樹露

秋拂百取霜

光業朝臣

髻髻不着景

暗疑行路長

愚作

和韻

雲霧翔風静

池水寒自霜

實岑卿

霜楓催醉處

向夕身跡長

一葉院宮

眺炊のちりぬさしきみおほ

同年

さしきねほくうひそめなまのさるさるちりぬ  
代アをさるさるさるさるさるさるさるさる



十何年とてなまきりけり 清くしける香るるあまをいへる  
隣まよふおのむせいのわらわらう 保あ  
よふの彩のふれ乃下屋よみとまきとえんはあうをさうあう  
祇園寺の彩く老様尼王福く中たのお祭をさ  
四方よ名姓を解のお祭行うて種くやうの南の北屋わ  
清きよんあうとまきとえんはあうをさうあう

おとよいててててこれめらうまはらよはうて 七月の歌  
南張松椿月さく 章句をいひて入るぬ結ぶの  
しうあうとまきとえんはあうをさうあう

為信卿

ふんらふとておのむせいのわらわらう 保あ

あゆむとまきとえんはあうをさうあう  
初めらばはらうあうとまきとえんはあうをさうあう  
あゆむとまきとえんはあうをさうあう

為久卿

あゆむとまきとえんはあうをさうあう  
あゆむとまきとえんはあうをさうあう  
あゆむとまきとえんはあうをさうあう

俊清卿

あゆむとまきとえんはあうをさうあう  
あゆむとまきとえんはあうをさうあう  
あゆむとまきとえんはあうをさうあう





見ゆるはあれんしとまきばみらすめらねと  
けらね一幸こ

七つ葉も子とさくしはあもわらうしむらも  
めつしんはあもさるははなるはあもさるはあも  
まのあもさるはあもさるはあもさるはあも  
山花のいさうし例のいさうしみるはあも  
いさうしあもさるはあもさるはあもさるはあも  
今とやあもさるはあもさるはあもさるはあも  
いさうしあもさるはあもさるはあもさるはあも  
あもさるはあもさるはあもさるはあもさるはあも

東嶺未着目

西山影早廉

南嶠非路遠

北麓到何遲

和勻やま侍殿の者ゆりの中、信つれい書付てにせ  
離宮新宵後 紅葉似花霏  
御宴悠々處 身如春日遲

信つれい書付てにせ  
ゆりもさるはあもさるはあもさるはあも  
かまのあもさるはあもさるはあもさるはあも  
又松のあもさるはあもさるはあもさるはあも

まあしはあもさるはあもさるはあもさるはあも  
あもさるはあもさるはあもさるはあもさるはあも  
あもさるはあもさるはあもさるはあもさるはあも  
あもさるはあもさるはあもさるはあもさるはあも

林丘寺為延々普明院の子に病神をこえ候に爰  
物あり禍は流るるあはるるあみくごありし由り  
ときつ川をよらるるいぬをまうて死なれを物との縁  
もたふさう物にふくぬさう液をわけくごらぬ  
山並よりきくごらるる者て京にぬりぬ

同十三年

正しく諸月のちめたむひをあらるるいそぎにぬけ  
十三日ありあらるるあらるるあらるるあらるる  
はくぬは死別のいそぎのいそぎにぬけあらるるあ  
きりるいそぎみる者てあらるるあらるるあらるる

けきうねりて念誦の経のいそぎにぬけあらるるあ  
らるるあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
ぬらるるあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
男れらるるぬらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
翁大納言を傳きしてはらのみまをあらるるあらるる  
いそぎにぬけあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
例のら茶のゆきあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
先かむひのそらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
のみいそぎにぬけあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる  
あらるるあらるるあらるるあらるるあらるるあらるるあらるる

長一とていつて伊予屋にたされし妻月記の  
不興とて名にみすの杖をうけつたつた  
面影いとしむしえだくゆきまれの山の上の  
鳥とてふあまの鳥とていふはなれぬの面を  
とてかげに記されぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を  
とていふはなれぬとていふはなれぬの面を

いふはなれぬとていふはなれぬの面を  
いふはなれぬとていふはなれぬの面を  
いふはなれぬとていふはなれぬの面を  
いふはなれぬとていふはなれぬの面を

今あまの鳥とていふはなれぬの面を

中流の内府

あまの鳥とていふはなれぬの面を

三條右納言

あまの鳥とていふはなれぬの面を

鳥丸右納言

いふはなれぬとていふはなれぬの面を

二世右納言

あまの鳥とていふはなれぬの面を

藤谷系中納言

ころあつた代業入つたころ返つて御幸御つたよき川の所  
武者小路三位

あつ川も流れ玉返つあつたよき御幸れあきとつた  
又河原あつた初様の校をみ返つたは

愚詠

都をみひきつたはさきかきあつたはしつたは

久世系中納言

都をみひきつたはしつたは

若谷系中納言

山崎系系あつたはしつたは

かゝるはつたはしつたは

同年

卯月十日人あつたはしつたは  
先下野のあつたはしつたは  
崎のあつたはしつたは  
あつたはしつたは  
あつたはしつたは  
あつたはしつたは  
あつたはしつたは

玲々那~~あま~~きくたみる後叢のむらさきよけ  
那~~あま~~のゆきゆきわきまこひて少株の松の  
わろほきゆきゆきゆきのゆきゆきゆきのゆき  
をを月を月を月を月を月を月を月を月を月を  
よみゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

享保十三年九月廿五日  
 同十四年 二月三日  
 同年 三月廿八日  
 同年 十月十日  
 同十五年 四月十二日  
 同年 九月十二日  
 同年 十月十六日  
 同十六年 四月六日  
 同年 九月十一日  
 同年 十月十八日

賀茂社 蟻池 神宮寺 高野川 正真寺  
 修学院山莊 上御座 大天王 詩仙堂 路鳥林  
 同 高野川 杉崎 賀茂 醍醐山莊 西賀茂靈源寺  
 同  
 幡杖園通寺  
 幡杖園通寺 賀茂  
 修学院山莊 高野川 神楽園  
 幡杖園通寺 高野川  
 幡杖園通寺 所菩薩池  
 修学院山莊 吉田 神樂密 知福院

享保十三年

享保十三年三月廿一日  
例の山荘の地を以て  
くめは後上を以て  
しるすなり  
けりといふは  
多の  
ある  
望  
山  
松  
し







みそりの河原くみほしきとてなむ数ふき波

秋三首

赤院

今日ゆく言もなき木柱をみよに事あるはとてあし

有崇川

秋とてせぬおぼくやけしは木柱あはれはなむねの夢

濃見小川

あはれあはてされば木柱あはれはなむねの月あはるを

冬三首

賀茂川

けふから宗のおもむきとてなむねの月あはるを

伊弉生飛

けふあはれ今もみよにけふの月あはるを

賀茂山

けふあはれ今もみよにけふの月あはるを

よみたらしく懐中れ後祝羽を念やめを

そららけ樓門をいり社のうらみとてこころわらふ

しほらけくみほしきとてなむねの月あはるを

るくえめを拜殿の歌紙をよとてなむねの月あはるを

親玉乃みよにけふの月あはるを

涙よりあはるをいりおもむきとてなむねの月あはるを

たかきとてなむねの月あはるを

年中の哥を毎つきとして俄に十五首の歌  
歌をその名のつくるにさういふ歌をきくねい京の  
人多くせし中院前内府武者少納言鳥元  
大納言治泉中納言三首つ歌をきくその後  
三多なると風情とめりし一紙をよみしむと  
あるをたふしふよめをきくねいさういふと  
ありし重なりあるに細歌のしるしは栲炭あり  
そのがよちのなかり栲炭のよと流る木細歌  
のやんをたふし月後ハツのめをよめてはしむるや  
いふよすむいふ所をばしむるいふよす  
まゝのいふはしるよめをきくねいさういふと

年中の歌を毎つきとして俄に十五首の歌  
歌をその名のつくるにさういふ歌をきくねい京の  
人多くせし中院前内府武者少納言鳥元  
大納言治泉中納言三首つ歌をきくその後  
三多なると風情とめりし一紙をよみしむと  
あるをたふしふよめをきくねいさういふと  
ありし重なりあるに細歌のしるしは栲炭あり  
そのがよちのなかり栲炭のよと流る木細歌  
のやんをたふし月後ハツのめをよめてはしむるや  
いふよすむいふ所をばしむるいふよす  
まゝのいふはしるよめをきくねいさういふと

年中の歌を毎つきとして俄に十五首の歌  
歌をその名のつくるにさういふ歌をきくねい京の  
人多くせし中院前内府武者少納言鳥元  
大納言治泉中納言三首つ歌をきくその後  
三多なると風情とめりし一紙をよみしむと  
あるをたふしふよめをきくねいさういふと  
ありし重なりあるに細歌のしるしは栲炭あり  
そのがよちのなかり栲炭のよと流る木細歌  
のやんをたふし月後ハツのめをよめてはしむるや  
いふよすむいふ所をばしむるいふよす  
まゝのいふはしるよめをきくねいさういふと



乃山龍翻大納之の節のさるるりくこも其れ  
 よう又赤乃らゆゆやく二つさなる木乃夜をば  
 河ありとつこはありとてとてとてとてとて  
 市波とく八所ありとてとてとてとてとて  
 ける一とつれいなるる手にはありとてとて  
 といてわつものなすすといつて右乃こよはりま  
 り三田所けいしゆ旅所ありとてとてとてとて  
 はるり旅所とてとてとてとてとてとてとて  
 しめとてとてとてとてとてとてとてとて  
 ちきあつてとてとてとてとてとてとてとて  
 飛くちきれとてとてとてとてとてとてとて

田所ありとてとてとてとてとてとてとて  
 比まてとてとてとてとてとてとてとて  
 ちまてとてとてとてとてとてとてとて  
 とてとてとてとてとてとてとてとて  
 つれきとてとてとてとてとてとてとて  
 ちとてとてとてとてとてとてとて  
 のありとてとてとてとてとてとてとて  
 所ありとてとてとてとてとてとてとて  
 といしとてとてとてとてとてとてとて  
 とてとてとてとてとてとてとてとて  
 ちとてとてとてとてとてとてとて  
 ちとてとてとてとてとてとてとて



日ハ盈るく入ね楓陣はめやうけて古世川は細  
きこたやそ反よ入ねまの秋ありしふし  
ふに病あめの秋風はあやと葉とさる然いこく  
これいふあし子葉するきふあふあふの空あり  
多き水ある楠又きさうそいきとあるこれハ空  
かよの河よそまそ門吃喰のこまけり具する也  
まにまのめく物さの葉さるあふあるね秋の  
ふふかよねけしあうあうめつしむたわし  
ときけいやそ秋の雪うて後耳かうあ  
はるあふくひまある今は文ねへいひて毎  
と候そろふあゝ葉よのこまはうとわあ

くわらふといさうあゝく昔人もまよころて侍  
及のわさをこれには京へ入つてあまの宮へあ  
ころあふまを聖殿のその祐すす女首れ領  
あうし今ちとく入内ありたは者とあれは後  
ま部とくまゝく三十首のりぬかハ夏谷を  
中納言又作てくし

秋天

愚作

曉提行盡到郊北  
流水高林清淨地

暗日秋天爽氣新  
更加畏敬拜靈神

秋日

遍躬

聖殿のふりまを神のゆゑるるふしやうし秋の日乃親



秋月

鳳輿拂曉出仙殿  
特見神山半輪月

實積

玉露金風幸路長  
餘光知是自和光

秋星

隆文

秋月すむるみはあづ早の光より玉露の光あり

秋風

通晴

六龍轉北幸林丘 此日天晴爽氣浮

水殿瓊臺殘暑尽 金風拂席鴨河秋

秋雲

為久

重なる雲の雨のしとけの移りてけりし秋の雲

秋露

為信

け秋は御幸ゆゑの神とありわが秋の玉とく

秋朝

實隆

輝く朝の山乃日秋朝の光

秋夜

為範

山川無處不清光 月敬桂華露赤香

臺風聲和寒蒼韻 侍臣忘都路程長

秋山

惟永

秋の山乃日秋朝の光

秋社

韶光

曾賞暖艷弄春光 又借清陰台夏涼

山近を知ら多雨西風 已看萬葉半為黃

秋野

従久

わづみの花乃さうらみ内侍とよとくまらみあれの秋

秋田

氏敷

幸路平田恩露濃

黄粱粒々帯金風

春苗秋稼雨晴若

何处村歌和歳豊

秋路

光荣

斤山乃りて宿し命一勇あめて父苦さるのつらさるは

秋川

為村

夜更八月のまこととてとら秋あつすむらあなみり

秋橋

実隆

月すめは雲やしらきと露のこぼれやふもりのけし

秋草

公野

よれらるは羽霧よまほするのつらさを秋のさるる

秋木

庚岑

秋色稍深満袖涼

松枝連朶露風香

又期神嶺葉紅日

玉駕再陪來北場

秋竹

宜通

橋と縁竹傍林塘

華底葉間白露香

壽色自追宿鳥路輾

秋風萬里拂雲長

秋鳥

愚旅

秋夕うきかきもの心陰知しよあめをかきまらるるをさるる

秋獣

稚富

月も今更けゆく人よのち麻乃いよは手もきつぬをいふ

秋虫

雅季

新代の杖乃しちきり今よりと秋の山にやきりたてて

秋扇

光西条

火を蒸已去更魚功 紙扇須截甚司中

瀨氣飛涼臨幸地 陪筵偏喜對恩風

秋衣

通夏

めつとそまわすらえつちのきりちりてこれ里のまわし

秋席

兼親

みちきりてむしきり細水乃ふのひりりきりいそ

秋色

為香

山姫乃らのまこといそいそ秋の杖乃しちきり

秋聲

韶光

吟鶯秋老蕉階月 宿鴈夜陣蘆渚風

颯々情高何処白 指頭來到入琴中

秋香

通躬

川好のこいさきよきあつ袖の香とこいさきあつこいさき

秋社

公福

くはれあつこいさきと秋の杖乃しちきり

秋祝

長義

あれ秋よりいそいそいそいそいそいそいそいそ

かてのいそいそいそいそいそいそいそいそ





日とぬくろおまた

山ろくそみとををねあまの香三字はくこのおち日お

日世三平春香略とふゆとたわのあひ

あひさかた

冷泉中納言

日のおまきわにいぬあちと記あふとみくの香湯あ

久世中納言

ちとあつと日記しくおまの芳出れはむは日方のらる強  
 あれよう誤りけりし山あゆみてゆくまなとては  
 田五田なるは家つきてあつあゆみてゆくまな  
 よあつてけりしとまよはる仙堂とくしあありを  
 榎本志らうなる中とわいはまをよとええとあ

ちとあつと日記しくおまの芳出れはむは日方のらる強  
 あれよう誤りけりし山あゆみてゆくまなとては  
 田五田なるは家つきてあつあゆみてゆくまな  
 よあつてけりしとまよはる仙堂とくしあありを  
 榎本志らうなる中とわいはまをよとええとあ

中納言はうらふにふけ仙堂はむくはる川  
 女山は在世の時分くすなうくあつてあつと  
 ン中あつてあつてあつてあつてあつとあつと  
 十段うらのる所あつたれはあつとあつとあつと  
 詩仙堂のちふらあつたあつとあつとあつとあつと  
 の小磯はもつ人の詩仙は像證とあつとあつとあつと  
 つくふらあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
 だつのはあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
 三階あり階子あつたあつとあつとあつとあつと  
 ありあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと  
 きれはあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

思物あるはるれいとうのやうなる若女山々所を  
物之自ぬ木の脇息をとりて此子自ぬ木のう  
こぬこいつのま作文と郎きう西復骨集にこた  
ねいこよしおつたこころのま寂あつこま女山  
半ありいあひて

かこのよめをとあまうりわあつそのかこつたた朽ぬ屋  
とつて

冷泉中納言

け若れあまこせのまかひんあはさるこころあつたけ  
この路をこころのこまぬあつたを母つこつて

すうーあれこて<sup>興</sup>のこつ路乃たつりあつた

ここのあまこ一葉<sup>ちゆ</sup>あつたあつたけ社に頼る天皇の  
社とふ頼るこつ神代巻は生<sup>キレカヒヒ</sup>握髪須髻とあつた

秘言あつた一葉の字とせとせし八船港の風か  
移り此神身と葉を鳴きやかたつたねいこ心は

たつたあつたつ路のたこころのまぬあつた

あつたはこつたつ路のつたるを新の園芝ち

西運るれいこちちち<sup>西運寺は</sup>こつたあ  
仙法塔いこちの葉とこつたあこ其草つこつた木  
ちこつたあつたつ木の木とあつたあつたつた  
又つ路をこつたつ路をたつた其たの葉とこつた

しらまき年け春にこころあふりてさつさるる  
そのゆきとすけ

都をゆく春にこころあふりてさつさるる  
本とすくす月観ふこころあふりてさつさるる  
のら隣雲のほろさききりけりてさつさるる  
こころあふりてさつさるる  
驚きうむるぬきやまてこころあふりてさつさるる  
筆窮遠のほろさききりけりてさつさるる  
すけおぬたむさききりけりてさつさるる  
えよこころあふりてさつさるる  
くすけりてさつさるる

しらまき年け春にこころあふりてさつさるる  
そのゆきとすけ  
都をゆく春にこころあふりてさつさるる  
本とすくす月観ふこころあふりてさつさるる  
のら隣雲のほろさききりけりてさつさるる  
こころあふりてさつさるる  
驚きうむるぬきやまてこころあふりてさつさるる  
筆窮遠のほろさききりけりてさつさるる  
すけおぬたむさききりけりてさつさるる  
えよこころあふりてさつさるる  
くすけりてさつさるる



巳酉仲春三日

太上法皇幸修學院

行宮者回竊聞門前警蹕遇林麓野僧

不論賤陋欽賦無語一章奉祝延

聖壽萬萬歲云

前建長玄瑞

二月東風暖正還

翠華特出九重閣柳垂

輦路供

宸詠梅咲 宮牆透

聖顏龍元浮崖上瀑盤頭擊起水

中山 御園直是神德境造物

獻齡春日間

此玄瑞六十年ある位の時禁中より  
前田安藝守といふ武士の子や  
の紀多き奉納するも亦三由乃  
一巻さやとの外文三車ねし  
なむ行せ

同年

活生のところへ  
あれは松う歩望茂の僧  
又西望茂の山よ奉茶壇  
ふあは旧院御幸

の事何れもまゝに任せられたるは、其の事今も  
幸な事と云ふべく、なほ、この事、其の事、  
と出たは、

何れも月を教へ、ぬらして、其をば、  
と、其すか、口すて、して、  
お、一日、お、して、や、

節、  
や、  
ら、  
の、

休幕、  
さ、  
お、  
ら、  
つ、  
あ、  
あ、  
又、  
お、  
と、  
さ、  
お、

程きこゑも我は今はうらやみお涙をけやうき  
新の方をこそまほしのこゝもわきつゝの木あぐ  
けいさくもあまのこゝのわたりをのこゝりある

愚歌

いひあふすものつゝ葉千たもあつゝあつゝあつゝあつゝあ  
きつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ

中務卿言

明日は次山きのけはーあのをきとらんや即事ゆけん

一平院言

きつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ

三條大納言

けいけいけいあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ

鳥丸大納言

炎春のさつきこゝのわたりつゝあつゝあつゝあつゝあ

奉陪 言鳥雲看北嶺躑躅

悪岩中納言

仙樂駐 曙帯 和風到處春淫脚 漏江葉々  
染成 暗色 群山 豔景 勝霜 霏風

又世中納言

いこひもあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあつゝあ

從 仙駕 躑躅

伏系二位

初見招崎躑躅紅帶山映水燒春風鷺奉  
燕翼弄晴景玉盡數巡錦帳中

武者小路三位

のけし紙の章をささく招崎はしやまのいひのこ  
空に布くそをのく盡くさく後くさくさく  
あかしくさくさく幸若壇く雲をすくきく出く  
これの昔のけしありを今は四方のわすれをのこ  
由にむけしけりてけのれきりしれありさくさく  
くさくさくあかしく盡くさくさくさくさくさくさく  
さくのわけては壇のあかき普門院の所影三拜

一 為普門の法暗誦一念佛廻向此後用山  
一 縁和尚の像に對し

けしはらきくさく一 祭れをさくさくさくさくさくさくさく  
あかしくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
号二幅同一衣箱内乃山の事いさ女房をさく  
一幅紙二物對心をはやくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
醍醐寺内府乃山莊をさくさくさくさくさくさくさく  
ゆきさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
旧流乃御時故冬基御每交り実を献す

旧説このみぬく御賞味有りて之をくみぬくたす  
おて風味とすられたる器を好むべく冬其  
郷乃時より今のお内府にいたる御給い  
送るぬきの木之是をいふるもの御給い  
こと木のふいにすもみれたるの古木  
少くちきる木各興てはぬせられ  
たふお、いふいふいふいふいふいふ  
まけふかば(にる処)おふいふいふいふいふ  
丁あつらふ内府乃郎山ろのやか  
うまのやふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふ

そのは海の子の礎として上なるはあつらふ  
市人そあつらのいふ礎をいふ童子をいふ  
つ各のふいふいふいふいふいふいふ  
興る今もいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふ  
のふいふいふいふいふいふいふいふ  
竹の葉、根、皮、いふいふいふいふいふ  
名酒を押しよるいふいふいふいふいふ  
すつてふれいふいふいふいふいふいふ  
あつらふいふいふいふいふいふいふ

文字れや二月とせむろしぬ会まじりの行ひ其おお  
ひきちろくしんとし知徳院用白の物もののこたじ  
をし次の用乃松戸牛とすまなるしむる  
うらほいつしあるしきりぬれいふ  
ろし黒き衣服を以てるしけり舟よ  
書たる後之同しきし目とせむろしぬ  
むくふのしひのるあり床又旧院の宿翰しほまで  
かつ谷しけりしとありし知徳院用白茶湯せられ  
しやししきりなるしむろしぬの格母  
をかとせむろしぬ

ふま店より物行買茶のしきしと別しぬれ人  
むくむ  
故大納言うらむしとせむろしぬ人せれの懐田の  
情うしむしむろしぬ那摩

きしちのむろしぬしむろしぬのむろしぬしむろしぬ  
まはらむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
れしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
しむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
しむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
あやとせむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
むろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
きしちのむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ  
あやとせむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬしむろしぬ

後日靈源寺僧從獻賀章

誠惶誠恐頓首謹惟

太上法皇日夜景慕 先帝干義耄之餘搜掌陳跡光  
幸清山顧視迷趣開啓宸襟是實資顯遺  
願榮昌祖宗者山林聳翠碩石點頭共惟  
義靜今當寺辱奉值此嘉祥何等盛事寧  
能勝辱不堪激切屏營肅々叙暢鄙懷賦  
賀章一篇以銘劫石無窮之爾維特享保  
十四龍集已酉三月二十有八日也  
孤峰拂路捧金輪綠鴨青山巖供緡御拜豈  
祗逐盧舜發輝佛祖萬年春

靈源默港義靜禪和尚

本師老和尚賦雅詩一章奉祝 御幸固

和嚴韵呈寸情云伏乞郅正

親慕古皇轉幸輪山花織錦柳垂清涼峰頭

添風月岳色溪聲別置春

清涼山下文什九拜

享保十四龍集已酉初春二十八日

太上天皇臨幸治北靈源禪寺是出於追慕

先帝歸敬先祖之啟襟實佛門之光輝  
而叢林潤色者也郭不感嘉式予一日  
偶爾至焉堂頭大和尚賦奉偈一章以賀

臨幸俾予和之予也辱預同門之數豈  
可固辭依大韻志喜之肅伏焉茲行  
六龍夙加馬一香輪行幸北山言如綸金地共和  
光寵遠主翁為記御遊春

祖要九頓拜

あましと後日よをくらふ

上野原の所幸むらぬはるお望みの山  
若く祖父昭良公の旧跡をまよひをうたふ  
あまねるもあつるこゝにほえ侍るあま

今やうはあつる幸のたふにあつてまよひをうたふ  
祖て傍のあつてまよひ

同年

あつる夏よりくるはあつて代はうのあつる  
あつる九月の山面白るまよひをうたふ  
あつて山荘のお景盛るあつるまよひをうたふ  
とつてあつるまよひをうたふはあつて  
其れ非あつるあつるまよひをうたふ  
同九月のあつるあつるまよひをうたふ  
の景あつるあつるまよひをうたふ  
つてあつるあつるまよひをうたふ  
いづくあつるあつるまよひをうたふ





梅園三位

いづれの木もわらわらとあそぶや君の御幸のふとほりて  
今朝の夕もあそぶふしのぬれもふちりこころなる  
あみちのさくらあつたれとさうめつ  
さうめつはなは清の二夕とほりてふとほり  
よつねのあつたれとさうめつはなは清の二夕とほり  
のそとふとほり

髻髻残紅山林麓遠惜哉今日霧中看 愚作  
朝陽既上欲暗處偏撥玉吟佳興歡 實岑  
多少風光殊俗境共傾盃酒莫令乾 光潔  
宸遊短晷正還舍緩步逍遙詠闌 通情

水縁松高橋上白清霜滿眼不嫌寒 宣通  
靈臺自是浮禪氣斜照襯雲映畫欄 通貫  
珠箔玳筵芝蘭馥頻催仙仗更盤桓 正逸  
追陪池畔暮天霽遙約千秋月也寬 長義

同十五年

あろの秋も可代江戸をのまらし時もたれ  
通るちと、御幸あつたれとさうめつはなは清の二夕とほり  
きつての御幸あつたれとさうめつはなは清の二夕とほり  
つきかたもあつたれとさうめつはなは清の二夕とほり  
かのこころあつたれとさうめつはなは清の二夕とほり

いふはふふふふふふは御幸を信ふ人きり  
わらわはふふふはふふふは世に世にわらわ  
わはふふふふふふは信ふ人多く年月  
十三年のふふふふふふはわらわのわらわ  
目測わらわふてわらわのわらわのわらわ  
わらわのわらわのわらわのわらわのわらわ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
普つふふふふふふふふふふふふふふふ  
ま附すいふふふふふふふふふふふふ  
のちふふふふふふのふふのちふふふふふ

ふふふのふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あきふふふ其堂なうてふふふのふふふ  
あうふふふふふふふふふふふふふふ  
七より八のふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
楊昔照國師のふふふと觀世音のふふふ  
ふのふふふ文英禪尼の畫像りつづつふ  
眞敬親と證はふは信ふ親との化ふ也  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
かふふふふふふふふふふふふふふふ

けりて楊をわらうく白華席ふいきあひむくみ  
さうし一処ある所は後水尾尾衣翰ニあり園通  
かけあう所の類ハ普照國師の弟子惠林と  
さう傍の所をこころましくくわくくわく潮音堂  
奉命なりとてしとしてき門先潮音堂と  
まうつまうつしうんふいけりて堂のよま  
よくろみか石壇の中央ハ石像ありその左右  
ニ十三の石をしのむしの形をほりて五壇の  
りし石壇をめぐりてハ世に石の壇礼ありといひ  
まうけりてさうしうかありしあつて堂の  
額ハ先師の位をた望さしゆんこうふん

ほろろくまきしをいひつと今あつてさう  
坂をらたうくさうかけハ差をいひきりてさう  
さういわくひなをさうしう園通ちふて題なり  
さうしう詩ををらうく種人よかく

餘花何在

公福

いつふうさういさうさうれりしは花をさうしう

新樹風

隆文

さう花のさうしうさうさうさうさうさうさう

行路卯花

為信

さうさうさうさうさうさうさうさうさう

遠尋郭公

久季

山々を尋ねてはるるもけりさふ名のれはふの御幸に

早苗多

愚詠

極夜とさるくつ田をくつと山をくつとつるあめは

野外堂

通晴

初夏緑陰枝上鶉生涼交浪犬牙田黄昏  
點々飛螢影野酌興來照夜筵

松下泉

實岑

逐涼移坐下松陰湛々奔泉一泓深山麓  
風光塵世外頻掌用味但因吟

寄雲意

師杏

夕月のとれねはひのあつてやけふ那斗る四方の字云

寄河意

為久

巴里の河を尋ねはるるもけりさふ名のれはふの御幸に

寄鳥意

光栄

あつてはるるもけりさふ名のれはふの御幸に

寄書意

宣通

晴日登臨游目時飯携円々擇深枝前村楊柳暮煙  
起山色勝臘月亦宜

谷古栲

弓野

もよおのなる縁と谷けり笑世をけりさふ名のれはふの御幸に

古寺鐘

為範

翠嶺重々山色晴圓通古寺物光清殘苑新樹興

何尽唯怕樓鐘報暮聲

田家木

從父

石のうしろ山田の産水ぬれいささの氷乃もくさる

山家眺望

雅富

世に好むくすめろ唐のいささみ都をさるるをいふれ

糸白短尺けりて若者冷糸多中細きささるる世の

けりてささるるささるるささるるの又悔埃もささるる

ささるるて又例の山并りゆいささるるはかりのささるる

あさるるささるるささるる月のかさるるささるる

たさるるささるるささるるささるる松のほろ月さ夜いささるる

後日同通ちの俗侶等訪ちて歎し

曾養太上法皇往昔潛龍之日行啓于當寺用

基圓光院尼大師之山亭輦輿敷日世以爲

寺聖朝新賜無雙之宸翰終成勅願之道場

也如今六十年後重又停輦輿半日親敷覽大

師之遺蹟寔未曾有之榮幸也

臣僧其甲

寫蒙

勅許佳此寺三十餘歲荷朝恩時渥矣老後

亦隱栖此寺而逢如斯好時恐懼歡躍豈可

言哉故不愧襪文綴俚詩一章聊述

野情萬

乙是一祝延敷等無窮二顯揚寺門光輝

爾

雲車重停北山邁夏日舒長輝石泉伏仰聖躬

倍安恭祝延敷等幾千年

享保十五 庚戌 歲孟夏十二日

寬溪永恕頓首

今茲享保十五歲孟夏之日 仙輿暫幸

臨當山寺門盛幸歲以加辱弊師 寬溪 恕

喜之餘綴俚詩一章以奉祝獻數 臣僧 亦

漫全其韻恭奉祈 聖壽萬安云

御駕峰嶺自日邊嶺松奏壽應溪泉麗光村被  
圓通境共唱南山祝萬年

大鷗 聖泚 誠恐誠惶稽首

同年

長月乃十二日午後（中略） 候 為てつ先  
かきくはく西の川系に休みありけき候ふいある  
山のふもとにききくはく候と京平南北に候  
ふくはく候と西水の山に候ふく候と  
又水に候ふく候と候と候と候と  
中へお祭といふの毎に冬巡云候と候と  
かきくはく候と候と候と候と候と

いささかちるしやうれしかは

河中 少室山人よとて深はくめきまはあはれなる葉  
る近く雲衣河乃流の西向くまみぬ

み後せつちるおのまきみらまは川の木をくくく  
思こまきれ白波いささか川乃流とおいなりし

河中 少室よある返哥よ醜陋あ内府

みり柿るんあつあつは深つめくくくくやまの葉

座尔は物ふんくくく章句あるはくくくくは

秋山紅獻觀 清二位

爽景日添長 愛宕前中納言

晚籟疑冬至 愚作

廣郊待月望 勘解由路舟

霧暗流水緑 一葉院宮

竹密岸風蒼 風早三位

啼雀爭投宿 栗原前中納言

歸鴻幾趣陽 清二位

飛盃花塢醉 愛宕前中納言

棄艇柙江邊 押小路前宰相

聯句表十句の埃はくく日にもねとくく出きて

くく夜よわくくくくくくくく山みくく草朽す

きめえ先佛あふくくくくく焼香く番門品

よみて念誦す白華唐の布く後水尾院辰

翰御製をかきたるはくくくくくくくく

入てし所詞書いりくく

出つてくくくくくくくくくくくくくくくくく

あれをくく埃をくくくくくくくくくくく

あといくく潮音堂ふくくくくくくくくく





くまのたけくらよりのりこそはるをしむととくといひしは  
こくすむねとふゆ路とともほしてくくぬんを  
ふびのたれとともいふるふりていふはまも也

同年

九月より十月又三十一日友の吉田神楽屋向  
ちとよわ修学院の山法十三年十一月十日  
ふるふね吉田より十月十日のふねとてはしは  
こかこわふる

の家のきけきふひ張りのまきしけい吉田こくすむの  
神楽屋より十月十日のふねとてはしは

あふくはふのふりなるふねとてはしは  
はふくはふのふりなるふねとてはしは  
こくすむ

ふねはあふくはふのふりなるふねとてはしは  
こくすむはふのふりなるふねとてはしは  
そのふりなるふねとてはしは  
よきふねとてはしは  
のこくすむはふのふりなるふねとてはしは  
みくらふねとてはしは  
ふねとてはしは

おひらりころるお母りし時おはたさるるいふしきよきよきよ

流のちよよに木のるあそこのあはれ木えんその

ちりりかみりめおらにいつし丸景よきよ

おむらりときわらよきよけき記木のるいふてなる流つせ

床のふけもの記ちの唐踏之むくの名乃婦とよ

さぬころ流と次に崇文許由七賢に二圃より小探出

ちりあしこみりきよて悦飲なとよき流景尾

山花よけりらの程おまひしよきしき

田のりきよふらふらあそこのあはれは

川とよつは流茶にかふ口のころる

何ぢりわられの流茶よきよきよきよきよ

とたかひのあては流とつたの白と女めら流る

よきよちよるてるあはれらるるしよ

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ

あつこのおんちよられらあそこのあはれ

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ

同十六年

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ

おはれおはれおはれおはれおはれおはれ



淀川をいへばものまゝに舟楫なるは  
あか<sup>律</sup>の左衣おほくまゝ人あつたふはなと  
櫓などこわしつゝおる布るゝつゝ人もあ  
らゝしものもまゝなうらつたはなとめく  
しつゝおのりつゝおはつてはつたよの  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり

淀川をいへばものまゝに舟楫なるは  
あか<sup>律</sup>の左衣おほくまゝ人あつたふはなと  
櫓などこわしつゝおる布るゝつゝお人もあ  
らゝしものもまゝなうらつたはなとめく  
しつゝおのりつゝおはつてはつたよの  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり

あか<sup>律</sup>の左衣おほくまゝ人あつたふはなと  
櫓などこわしつゝおる布るゝつゝお人もあ  
らゝしものもまゝなうらつたはなとめく  
しつゝおのりつゝおはつてはつたよの  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり

あか<sup>律</sup>の左衣

愚作

淀川をいへばものまゝに舟楫なるは  
あか<sup>律</sup>の左衣おほくまゝ人あつたふはなと  
櫓などこわしつゝおる布るゝつゝお人もあ  
らゝしものもまゝなうらつたはなとめく  
しつゝおのりつゝおはつてはつたよの  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり

あか<sup>律</sup>の左衣おほくまゝ人あつたふはなと  
櫓などこわしつゝおる布るゝつゝお人もあ  
らゝしものもまゝなうらつたはなとめく  
しつゝおのりつゝおはつてはつたよの  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり  
つゝおのりつゝおはつたよのつゝおのり

一乘院宮

清くはらばらきとてしるす所はつゆたふもあまの山守の心

知恩院宮

多世母の心もあまの山守の心とていふ盛なり

妙法蓮華宮

冷泉至中納言

初より此の心もあまの山守の心とていふ盛なり

押山法華宮

初夏遊

玉函見山野 躑躅 棠花 芥菜

茫滿畝黃千里 躑躅照山 辰西方 今日加陪瓊

席下又憐春後有春光

巖榴皆絳嶺

無定

暮春時 山本をき

思作

月とて清き夕水照る

一乘院宮

飛艇滿帆風

通貫

芦葉一遇雨

實積

竹梢羊卷櫛

無定

燈火の光もあまの山守の心

一乘院宮

夕朝の光もあまの山守の心

波の心もあまの山守の心とていふ盛なり

梅塔の心もあまの山守の心とていふ盛なり

ほろに入りぬる心もあまの山守の心とていふ盛なり

為さぬ心もあまの山守の心とていふ盛なり

下野へあまの山守の心とていふ盛なり

一とよりあふは事人として遣て難人と辨らる  
 一と云ふはついでに蓮のついでにひくす名  
 うらゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 新人よりむくまを河をあらみ下野鴨家  
 此紫のあらむらむきあれららの赤とあむし  
 泉の乃らむきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 櫛乃らゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 てふのうてぬぬ日はぬきゆきゆきゆきゆき  
 又京の入り門見らるぬきゆきゆきゆきゆき  
 万々ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

同年

卯月より暖ハたむきゆきゆきゆきゆきゆき  
 ちわち月山をたむぬれゆきゆきゆきゆきゆき  
 一とゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 り比ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 西ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 下野鴨家ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 ちてゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 ちゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
 丁はゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき





多分此の事なりとて月をみる風吹くも  
なすぬきいさくくろくつれをみつけこころ  
のちよふらんわきのこころなんた也

新外明月

愚詠

きりぎりすのこころをいひおのふまことすれむふふの月  
武者山崎が納言

たのしみおのこころをいひおのふまことすれむふふの月  
烏丸が納言

みゆぶるのこころをいひおのふまことすれむふふの月  
栗原が納言

あふらぬ世のこころをいひおのふまことすれむふふの月  
藤谷が納言

久世が納言

袖入る霧か入るいのちの月をいひおのふまことすれむふふの月  
夢岩が納言

夢岩が納言

帷靴秋虫田圃裡金風静夜捲微雪郊原弄月

移仙仗輦路清光添二分

藤谷が納言

かりとるにせらるこころをいひおのふまことすれむふふの月

冷泉が納言

あふらぬ世のこころをいひおのふまことすれむふふの月

押小路が納言

繡野鮮々明月中露華綴玉幾千最堪憐佳興

九秋夜清亮前村一留風

伏原二位

輦路黃雲滿地霜瓊林綠水散晴光去年  
今夜射山月雅宴移來用野塘

風早三位

一鑑清光耀今名千山萬水恣吟情此霄若  
不陪金輦爭先四郊秋影明

武者少路三位

さく秋のよやくらえる月しけ名ししけ子のく乃御音

梅園三位

くろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれ

老翁三位

季秋為月幸圓通雲霧吹收薄暮風曠野  
明輝與何盡露華虫韻詠吟中

綿織大湖

ふかきみのあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれ

東園中坊

末をきけりもあつあつしあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれ

後谷中坊

くろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれ

冷泉中坊

秋のこのあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれくろくあはれ

梅屋信彦

七月の五日に行きあふるふくまのふかたねをえねぬ

同年

神無月ありは竹屋院山荘のわみちちうととるは  
十日ちやうとの日さきお祭はさきうらなうあつま  
そめあやむらうりうらわあつとらうとふらう  
お祭の貝殻をくはさる様めうとあつとふらうはさき  
おまよふ山荘の地味舟とふらうとふらうはさき  
乃所幸らうと四代の地味舟と其舟多年ふらうと

一かたといひの程ふつ新橋して後ハ早船年をう  
船のうらうらなうはさき舟無と信をうと  
あつとめぬる舟とやとたれ此の屋ふとあつ  
とらうととたれ舟とあつとれはさきとふらうと  
わづらひて角舎う方ははる高瀬舟のうらふ山荘  
乃つけたお意うとさきとあつと舟らうとつとらう  
まはあつと舟とやと所司代と舟つとととたれはさ  
中さきと舟とけとさきととらうとてとらうと角舎  
小舟ととととととととととととととととととと  
のうとたれはさきととととととととととととと  
花つとととととととととととととととととととと



登るも母はまはるをハ鞠の垣あし〜  
今何日富くあ〜  
あけ松乃木〜  
はあ〜  
こは〜  
こ〜  
久世も中納言〜  
物とろれ〜  
勺る〜

催興東園舎

和少路子室相

恣望南露斬

愚作

鞠場只知福

愚作

歌席偏榮恩

和少路

楓樹導仙躰

妙法庵宮

竹林避俗喧

愚作

鶴郡殘月咲

一葉庵宮

免翹斤波走

妙法庵宮

釣外求何事

和少路

醉中綴俚言

一葉庵宮

日たげぬ〜  
前より木乃江際十方の登り〜  
つ〜  
次〜  
管意の〜  
羽端の〜  
ぢ〜

かの末に後集に...  
りて

とるに那らあ...  
る...  
あ...  
て...  
ら...  
あ...  
み...  
事...

は...  
あ...  
今...  
...  
は...  
に...  
又...  
月...  
ま...  
あ...  
い...

池のありぬをのゝお祭のす

式部卿宮

御ぬひのいづるひらに侍るに此存れむらのあゝお祭

中務卿宮

あはれふら乃お祭や御幸するらるるあつちたあはれむ

一喜院宮

内由りわらびてあはれむきまはらわらばの侍る所のあはれ

鳥丸お大納言

御幸するのほお祭の唐絵きんこのあはれむらばはらむ

久世お中納言

うはれむらばあはれむらむらわら御幸するあはれむらむ

武者小路之位

河やあゝあはれあはれむらむらあはれむらあはれむらあ

祇園修学離宮

後、のま

風物穏看修学村猶今玉鞞離宮園

天光日色豈唯裕紅葉池邊鶴首敦

尊胤 知恩院宮

愚詠

諸人しらむれあはれあはれむらむらあはれむらあはれむらあ

式部卿宮

万代あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

中務卿宮

馬の代の... 龍... 舟... 幸... 馬丸... 納言

馬丸... 納言

久世... 中納言

武者... 三臣

賀... 龜入... 舟中

玉虹千丈白波... 鮮行幸... 緑池... 幾萬年

長仰高山松栢... 壽清江使者... 乘樓船

真胤

かくくあろ... 権子宮... 青蓮... 妙法... 舟... 幸... 馬丸... 納言

紅楓高下... 繞亭... 頭靜... 泛蘭舟... 橫碧流... 金殿... 瑤池... 世玲... 外清... 遊一日... 在舟... 丘



右修学院舟中作

竟春 妙信家三

又その時存中後より有醜醜る内庭中山の大蛇云  
三系の大蛇くや実ふ中ゆい 坊系二后山城山にたよ  
めら其外まのふ力まはる堂上非熟人あめゆい 集  
は海日舟のり所喜な役者入興乃りせ

中尾内府

いしを備ね招へり入ら老の所いれよこれいそきうに  
かこいそきうめらふ地乃中培いふめらるここの世ふいぬ  
一ふしむらふふふふと備つていそきの物うたのぬ葉い

三系大納言

後日記く初園傳形和江いそきうにのつけれ  
石のふらりり一島あふみてお経いなる中い

右

御幸宸記志以中野郷言本式アア云  
御書写し写し

元文四年二月中旬

林上吉を執り

右先考若松之御書年云々

關原門後高策様敷野生為



